こんなところに

仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

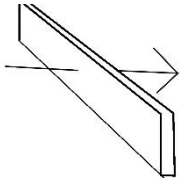
境界（きょうがい）

前回「境（きょう）」について書かせていただきました。我々の世界を構築しているものは、我々の認識で成り立っているというものでした。私の認識で成り立ちますので、千差万別です。見えるものは同じでも違う認識で感じているのです。このドラマは面白い、面白くない。これも認識によって違います。

今回ご紹介の「境界（きょうがい）」は、その認識の範囲のことを指します。仏教では「きょうがい」と読みます。範囲といいましても、心の範囲もありますので、ここからここまでと見えるものだけではありません。

そして、私の境界（きょうがい）と人との境界（きょうがい）が触れ合うところを縁（えん）と呼びました。現在の家にはなくて、昔の家に有ったもの。それは縁側（えんがわ）です。そこでは、土地の境界線は消えて、人と人とを結ぶ大事な場所でした。

私が作り上げた境界（きょうがい）が妨げとならず、私に届けられる阿弥陀如来（あみだにょらい）の慈悲（じひ）の光を、無碍光（むげこう）といいます。煩悩（ぼんのう）に迷う私の認識で見ることは困難ですが、それが妨げとならないのです。



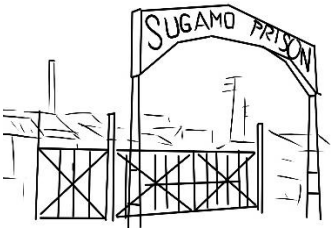
正しさを他人に伝える時は、面を突き刺す半分くらいの熱量がちょうどいい　by 赤信号

教誨（きょうかい）

刑務所などで、受刑者に教えをさとす人を教誨師（きょうかいし）と言います。戦前までは公務員扱いでしたが、戦後は国から手当てが支給されることはなくなりました。無給ということも相まって、仏教界（ぶっきょうかい）では規模の大きな東西本願寺（とうざいほんがんじ）が中心となり活動をしています。

戦後、教誨師（きょうかいし）として東条英機（とうじょうひでき）氏などのA級戦犯の処刑に立ち会ったのが、本願寺派僧侶花山信勝（はなやましんしょう）師です。GHQの要請により、比較的若い僧侶（そうりょ）を求めていた師に役割が与えられました。最初は念珠（ねんじゅ）を持つことも拒否をしていた東條（とうじょう）氏も、罪を悔いつつ、阿弥陀如来（あみだにょらい）の慈悲（じひ）に照らされていることを慶び、

「さらばなり有為（うい）の奥山けふ超えて
　弥陀（みだ）のみもとに行くぞうれしき」

と辞世の句を読みました。

私は仏教学院（ぶっきょうがくいん）での授業で教誨師（きょうかいし）の先生から話を聞く機会がありました。「相手に更生を願うならば、こちら側がまず、許すという前提がなければならない。罰するだけでは更生はない。これは刑務所だけではありません。会社でも家庭内でも同じです」と。